

## 川口栄男：追悼奥田武男先生



九州大学名誉教授 奥田武男先生は、去る平成 17 年 10 月 10 日、多発性骨髄腫にて逝去されました（享年 76 歳）。闘病 1 年余りの急逝でした。

奥田先生は昭和 4 年広島県で生まれ、昭和 28 年 3 月九州大学農学部水産学科を卒業後、大学院に進学、その後、昭和 31 年 6 月九州大学農学部助手、昭和 37 年 3 月同助教授、昭和 60 年 9 月同教授を歴任し、平成 5 年 3 月停年により退職しました。この間、学内にあっては、図書館商議委員会委員をはじめとして各種委員を勤め、学外では宮崎大学、島根大学など多数の大学の非常勤講師を併任しているほか、日本藻類学会、日本水産学会等の評議員としても学会発展に尽力しました。また、地元福岡市をはじめとする地域の振興、行政にも大きく貢献しました。

奥田先生のご研究を簡略に紹介しますと、第一に挙げられるのは流れ藻に関するものです。これはモジャコ（ブリの幼魚）の生態解明にも関連する水産学上でも重要なテーマの一つでした。流れ藻調査は昭和 32 年から着手し、まず九州北岸における流れ藻の出現時期、出現量、出現地域を明らかにしました。その後、調査地域は日本全域に拡大され、ほぼその動態および形成のメカニズムを明らかにしました。一連の研究成果はモジャコの生態解明にも大きく寄与し、その後の国や県によるモジャコ調査の端緒となるなど、水産養殖業の発展にも大きく貢献しました。

第二は、紅藻類・緑藻類の生殖細胞に関するものです。奥田先生は紅藻オゴノリ類の果孢子、四分孢子の放出経過を様々な処理により検討し、その放出機構の詳細を明らかにしました。また、緑藻アオサ・アオノリ類については、生殖細胞の形成および放出の周期性について検討し、結果として、

干満差の大きい地域では、アオサ・アオノリ類の成熟は小潮時であること、一方、干満差の小さな日本海沿岸では、その周期性は潮汐に関連せず 6 日周期であることを明らかにしました。これらの成果も水産学上重要な知見を提出したものとと言えます。

第三は、藻場に関するものです。先生は種々のホンダワラ類の卵放出の周期性、受精後着生可能な幼胚に発達する日数、および幼胚の着生力について詳細な検討をおこなうことにより、ガラモ場造成における合理的、計画的採苗のための基礎的知見を提出しました。また、ガラモ場の主要構成種であるアカモク、シダモクについて、形態学的、発生学および生態学的な観点から詳細に研究しました。シダモクは長く稀産種とされてきましたが、その生殖構造や初期発生過程を初めて明らかにするとともに、近縁種であるアカモクとの差異を詳細に検討しました。シダモクの近年の分布拡大についても広範な調査により報告しています。さらに、アカモクは通常春季に成熟しますが、奥田先生は秋季から冬季にかけて成熟する個体群を見出しています。ガラモ場の維持・管理あるいは造成を考える上で、異なる生態的あるいは生理的特性をもった個体群の存在の発見は非常に重要な知見です。

このように奥田先生のご研究は海域の生産性に関するものから、海藻群落構成種個々の形態、分類、生態に関するものまで広い分野にわたっており、藻類学および水産学上大きな貢献なされたと言えるでしょう。退職後も個人的に研究を続けておられ、成果を発表されるのを私どもが大いに楽しみにしていた矢先のご急逝で、まことに残念なことと思わざるをえません。

奥田先生の人柄は、温厚で誠実、一言で‘紳士’という言葉

葉がびったりだったように思います。いつも姿勢がよく、静かに諄々と話された印象が非常に強くあります。個人的な思い出はたくさんあってきりがありませんが、今振り返って考えると、先生と私とは、昭和63年(1987年)6月に私が助手として九大に赴任してからのお付き合いですから、大学内では平成5年までほんの6年あまりに過ぎません。実感的にはもっと長かったように思うのですが…。ご在職中、先生とは本当にいろいろな場所に採集に行きました。最初に連れていってもらった場所は、長崎県の西海橋で、ここはちょうど大村湾の出口にあたり、干満差により大きな流れが生じます。そのことを知らず、はじめて川のように流れる海水を見てとても驚いた記憶があります。西海橋は先生と何度も一緒した思いで深い場所の一つです。その後も山口県青海島、広島県柳井市、最も遠くは瀬戸大橋を渡って香川県丸亀市まで遠征しました。大抵は教室にあったワゴン車で行きましたが、時には先生ご自身の乗用車だったこともあります。そういう時、先生は必ずご自分で運転されました。これは私が免許とりたての頃に運転が下手だったせいもあるでしょうが、それよりもご自分で運転することがお好きだったのだと思います。確か大型2種の免許もお持ちだった筈です。几帳面な性格で、これは研究のスタイルについても全く変わりませんが、採集に行く前には必ず窓を拭き、エンジンオイルのチェックや、ワッシャー液、タイヤの点検をされていた様子が今でもありありと浮かんできます。

先生は学生の頃サッカーをおやりになっていたそうで、かなりの選手だったときいています。そのせいか、退職された後もいつまでも若々しいご様子で、時々教室に来られる時や、OBを含む教室の忘年会でお会いする時にも、老けた印象を受けたことは一度もありませんでした。福岡植物友の会という植物愛好会の会長としてよく会員と山歩きされていたとも聞いています。体力も相当おありになったのでしょう。今思えば、そのことが逆に病気の早い進行につながったのではないかと、とふと思ったりするわけです。

この研究室(旧農学部・水産学第二講座)は、瀬川宗吉先生から始まる海藻研究の長い伝統があり、多くの優れた人材を輩出した教室です。奥田先生からひきついでこの伝統を何とか次の世代に伝えていくことが、不肖の助手だった私の先生へのせめてもの恩返しのように思います。謹んで哀悼の意

を表します。

## 主要業績目録

- シダモクに関する二三観察. 九州大学農学部学芸雑誌 15 (1955).  
 オゴノリの果胞子放出に関する研究. 第1報 陰干しに伴う果胞子放出について. 九州大学農学部学芸雑誌 15 (1955).  
 シダモクから見たホンダワラ属の雌雄性. 藻類 6 (1958).  
 流れ藻の海藻学的研究-I. 津屋崎近海流れ藻の周年変化. 九州大学農学部学芸雑誌 15 (1959).  
 The floating seaweeds of the sea to the west of Kyushu. Records of Oceanographic Works in Japan (Special Number 5) (1961).  
 Some comments on the movement of the floating seaweeds. Records of Oceanographic Works in Japan (Special Number 6) (1962).  
 流れ藻の海藻学的研究-IX. 日本周辺各地の流れ藻種類相. 九州大学農学部学芸雑誌 21 (1964).  
 オゴノリにおける四分胞子の放出. 九州大学農学部学芸雑誌 21 (1964).  
 紅藻キブリティグサの果胞子の付着について. 九州大学農学部学芸雑誌 15 (1972).  
 Reproduction of ulvaceous algae with special reference to the periodic fruiting. I. Semilunar rhythmicity of *Ulva pertusa* in northern Kyushu. Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University 18: (1974).  
 シダモクの雌雄性における新たな性質および日本での分布. 藻類 25 (1977).  
 ホンダワラ類の着生機構. 近海漁業資源の家魚化システムの開発に関する総合研究 (1981).  
 Egg liberation in some Japanese Sargassaceae. Xth International Seaweed Symposium (1981).  
 褐藻ホンダワラ類, とくにアカモクの雌雄性. 遺伝 36 (1982).  
 Settlement of germlings in ten fucal species. Hydrobiologia 116/117 (1984).  
 アカモクにおける雌雄同株個体と秋季の成熟. 藻類 35 (1987).  
 Reproduction of ulvaceous algae with special reference to the periodic fruiting. IV. Fruiting on successive days and growth-rate of *Ulva pertusa*. Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University 32 (1987).  
 春・秋に成熟するトゲモクの卵放出, 胚発生および光合成速度の季節変化. 藻類 38 (1990).  
 福岡県津屋崎に生育するホンダワラ類5種の卵放出. 日本水産学会誌 58 (1992).  
 褐藻ジョロモクとアカモク幼胚の低照度下の生長. 日本水産学会誌 59 (1993).

(九州大学)